

花袋の『田舎教師』は、花袋が「遼陽の攻略の結果を、死の床に横たわって考えている小さなあわれな日本国民の心は、やがてこの世界的光栄をもたらした得た日本国民すべての心ではないか」(『東京の三十年』二五三頁)という、自らの心情を超越した作品である。だから、当時の「社会」の事象や動向に迎合しようとした動機や内容ではなく、自らが「舞台が私の故郷に近いので」と語ったように親近感もあって、「地」の地理、地形、地名、四季を彩る動物や植物、そして名称、「日振り」「さで網」などの風俗習慣を詳細に織り交ぜ、紡ぎ、醸し出した特異な物語として評価できるのではなからうか。

五、終わりに——「田舎なれども」の精神を継ぐ

花袋の『田舎教師』は、創作当時の「人」や「社会」、そして「地元」の状況や実態を、それぞれ「環境」という観点から繙き、一〇〇年もの時を経た現代と合わせて味読すれば、「人」「社会」「地元」の歴史的な「環境」を再認識することができる。さらには変化の加減や多少、そして是非などを問いながら考察すれば、未来に供し得る古くて新しい物語なのだ、ということが分かる。確かに昨今の実態を調査したり、統計を算出したりする必要もあろうが、今や『田舎教師』を読むということは、作者・花袋の創作の動機や意図、発表当時の反響を超えて、昨日から今日、そして未来に連なる「環境」の尊厳について研究すべき情報や資料の提供にも寄与している、深淵な内容や清新

な魅力、不滅の価値を秘めた物語なのだということを改めて教えられたのである。だから「教師」の何たるかを自問すると共に、「田舎なれども」の精神や思想について、さらに考察したり理解したりしないではいけないのである。——「田舎」とはただ単に地域や場所を指すだけの名称ではないということを含めて。

(ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授)

注

- (1) 河合雅雄『子どもと自然』(岩波新書 一三三) 一二頁より引用。
- (2) 注(1)に同じ。一三頁より引用。
- (3) 注(1)に同じ。五頁より引用。
- (4) 小林一郎『自然主義作家 田山花袋』(新典社) 一五三―一五四頁より引用。
- (5) 田山花袋『田舎教師』(新潮文庫) 五頁より引用。以下、『田舎教師』の引用はすべて新潮文庫に拠ったが、頁数は割愛した。
- (6) 「都視学」とは、郡役所の学務課に属する教育関係の役人のことで、教育現場を視察したり、助言や指導をしたりする。今日の指導主事にあたる人のことだと思われる。
- (7) スタンダール(大岡昇平訳)『恋愛論』(新潮文庫) 一四頁より引用。
- (8) 「恣辱」とは仏教用語にて、徒に耐えたり我慢したりすることではなく、事の実現や目的のために必要な時間や方法、手段などに耐えることであり、「石の上にも三年」に限らず継続することを求められる。
- (9) 『齋藤茂吉歌論集』(岩波文庫) 一二七頁より引用。
- (10) 『啄木全集』(筑摩書房) 第四卷九九頁下段。明治三年の「林中書」より引用。
- (11) 伊豆利彦『日本近代文学と天皇制』より引用。『日本文学講座』大修館書店、第六卷一〇頁。
- (12) 小田切秀雄『日本近代文学』(青木書店) 二二〇―二二二頁より引用。
- (13) 小笠原真『近代化と宗教——マックス・ヴェーバーと日本』(世界思想社) 一九七頁。
- (14) 『日本の近代化とナショナルリズム』の章より引用。一九〇八年一月三〇日復刻、七一頁より引用。
- (15) 『文章世界』(博文館)。第六卷第一四号、一九二一年一月五日。一九九頁。「幼なき頃のスケッチ」のなかの「朝霧」より引用。
- (16) 『田舎教師』(新潮文庫) 二五八頁。福田恆存の「解説」より引用。

真似の出来ない独特の口調や抑揚もあるだろう。つまり、後知恵を加えると、「日振り」という言葉は、夜に川や沼などで松明などを灯しながら魚を誘き寄せて網や罾などで獲る漁法だという。また、次のような描写もある。

発戸の方に散歩したのは、田植え唄が野に聞こえるからであつた。花が散つてやがて若葉が新しい色彩を村に漲らした。路の角で機を織っている女の前に立つて村の若者が何か饒舌していると、女は知らん顔でせつせと梭を運んでいる。機屋の前には機廻りの車が一二台置いてあつて、物干しに並べて懸けた紺糸が初夏の美しい日に照らされている。藍の匂いが何処からともなくプンとして来る。竹藪の蔭からやさしい唄が微かに聞こえる。(二十九章)

発戸の右に下村君、堤、名村などという小字があつた。藁葺き屋根が晨の星のように散らばっているが、此の処では利根川が少し北に偏つて流れているので、土手に行くまでにかなりある。土手にはやはり発戸河岸のようになるところに赤松が生えていた。しの竹も茂つていた。朝霧のしとくに置いた草原のなかに薊やら撫子やらが咲いた。(二十九章)

というような調子である。地名と共に草花の名称は、その季節に応じて「関さんは文部の中学教員検定試験を受ける準備として、頻りに

動植物の研究をしていた。その旅でも実際に就いて関さんは頻りに清三にその趣味を鼓吹した。」(四十一章)と、職場の僚友である「関さんはずいかずらやじやのひげや大黃などを枯れ草の中に見出して教えてくれた。」(四十一章。傍点は原文通り)とあり、「利根河畔羽生に移らんとす」まで住んでいた行田は、「忍沼の錆びた水にはみぞかくしの花がところどころに白く見えた。」(五十章。傍点は引用者)や、「榛の並木に沿つた小川では、子供が泥だらけになつて、さで網で雑魚をすくつている。繭売りの車がぞろぞろ通つた。」(五十章。傍点は引用者)などという描写もある。私も「藍の匂い」「しの竹」と共に「薊」「撫子」の花、「赤松」「榛」などの樹木は知っているが、「みぞかくしの花」「すいかずら」「じやのひげ」「大黃」などの植物、そして「さで網」が漁具か漁法かは知らない。案外、よく見慣れていながらも、当時の「地元」固有の通称や俗名のために想起できないのかも知れない。冒頭の「田圃にはげんげが咲き」の「げんげ」や「蝸牛」(五十章)なども実物を見れば、確かに「ああ、これならば」と承知し、それぞれ「地元」独特の別名で呼ばれていることが多いのではなからうか。

このように『田舎教師』には、創作当時(明治四二年一〇月二五日に出版された)の熊谷、行田、羽生の各地を中心とした地理や地形、地名、そして季節を彩る動物や植物の名称と共に実物、風俗習慣などが詳細に描写されている。これらに包まれた暮らしや自然の生態は、物語を補完する「名脇役」にして「名助演」たちであり、「地元」の「環境」を醸成する素材として貴重な遺産ではなからうか。つまり、

職に就いていたが、明治五年に辞めさせられた。やがて明治六年の末、旧藩の先輩で、すでに司法省に勤めていた小野田元熙もとよしを頼って上京した。幸いにして翌七年の一月三日付けにて、東京警視庁第五大区の巡査に採用され、下谷区坂本署に勤務するようになった。翌八年の一月に一等巡査に昇進したのを機に、まず兄の実弥みよ登を呼び寄せて坂本小学校に編入学させた。翌九年の三月には妻、花袋などを上京させ一家を構えた。

ところが明治一〇年二月、西南戦争が勃発すると、父・銚十郎は家族の反対を押しきって警視庁別働隊べつくわうたいを志願し、戦地に向かった。現地政府軍は、熊本城を包囲する西郷軍を背後から脅かすため、八代方面の宇土に上陸した。父・銚十郎もこの作戦の一団のなかにあつて、熊本城への進軍中、四月一四日の午後、肥後の国益城郡飯田山麓の戦い（御船の戦い）で戦死してしまつた。享年四〇歳であつた。八代市内にある横手の官修墓地に葬られている。——花袋は六歳にして父親を失つたのである。八月になると母はやむを得ず、幼い花袋を連れて祖父母の待つ家郷・館林に引き上げた。在京一年余りであつた。

花袋は帰郷後（明治一〇年八月）に地元じよんの館林東学校の下等小学校八級に編入学したものの、九歳（明治一三年の冬）という幼い身の上で、「足利の薬種屋に丁稚奉公に」やらされたのである。「其の頃、子弟を商人に仕立てようとするのが士族の間に流行した。役人は免職の心配がある。自分で稼いで生活して行く商人に限る。誰も彼も皆なかう言つた。」¹⁵と追懐している。翌一四年の二月には祖父に連れられて上

京し、今度は京橋区南伝馬町にあつた有隣堂という書店で丁稚奉公に励まなければならなかつた。有隣堂書店にて一年半余り働いて、明治一八年一二月、一四歳の花袋一家は、兄の実弥登が修史局（後の東京大学史料編纂所）の書記として就職したのを機会に、姉婿の石井収の手配もあつて牛込の市ヶ谷富久町二〇番地に転居したのである。花袋にとつては三度目の上京である。

こうして花袋は卒業という学歴を持たずに家郷を離れて背水の陣、かつ清貧のなかにあつて困難を克服すべく「田舎者なれども」と努力を惜しまなかつたのである。その後は成長につれて小説や紀行文の創作のために、あるいは取材のために家郷の館林に限らず、近郊の各地を訪ねては「地元」の地理や風俗習慣について熟知するようになったと思われるだけに、花袋の生い立ちや境遇が加味されて、「それに舞台が私の故郷に近いので、一層その若い心が私の心にしみ通つて感じられるように思われた」に違いない。だから『田舎教師』の主人公は林清三であるよりは、私にはそれらの田舎町の風物や生活であるようにおもわれます。¹⁶と指摘されるのも無理からぬのである。

『田舎教師』は、その土地や地域に咲く四季折々の草花の名、樹木の名、大字小字と思われる地名、そして色々な「風物」が描写されているので興味深い。その一例を挙げれば、「『わしらもア、この春ア、日振りなんぞはよすべいよ』という表現で、（改行して）『湯気の籠もつた狭い銭湯のなかで、村の人々はこうした噂をした。』（二十七章）とあるように、「地元」に息づいている用語や名称に気づき、さらには

た。何処どこに行っても、その小林君が生きて私の身边について廻まわつて来ているのを感じた。(『東京の三十年』二五三頁)

人は生まれてくる時間や場所、親を選ぶことができない。それでいて人にはすでに「社会」という「環境」が与えられ備えられており、「地元」という「環境」のなかで生まれて育つ他はないのである。

林清三こと、小林秀三のいう「二十六年故山を出でて」とは、すでに「その頃父は足利で呉服屋をしていた。(中略)七歳の時没落して熊谷に来た。」(三章のはじめ)とあるのだから、「明治二十六年」の「七歳の時」まで、明治十九年生まれにして栃木県の足利の地にて育ったということである。小林秀三の生没は、明治二十六年(一八八四)から同三七年(一九〇四)と報じられている事実とのズレに気づくのだが、創作上の事ゆえに詮索してみるほど秘匿されているものや姑息な意図はないであろう。小林秀三自身の記憶違いか、花袋の写し間違いなのであるが、事実はどうなのかと問い合わせて見たい気もする。

私は、むしろ「地元」についてこだわってみたい。「二十六年」の「七歳」から「熊谷の桜に近く住むこと数年、三十三年には此処ここ忍沼しのぬまのほとりに移りてより、又数年を出でずして蝸牛かたがひのその如く、又も重からぬ殻を負ひて、利根河畔羽生に移らんとす」の通り、「熊谷の桜に近く」は、荒川の土手(堤)につらなる桜のことであろうし、今その面影をどうぞ桜の名所に数えられている。やがて「七年」余りのあと「此処ここ忍沼」に転居したとのことである。

「忍沼しのぬま」は、かつての「忍藩しのはん」(十萬石)にして「忍城」の名残にて「古びたる城下」町・行田の中心部である。その「忍沼のほとり」から「又数年を出でずして」「利根河畔羽生」へと転居したというのである。利根川を越えれば花袋の故郷・館林の町である。花袋が「それに、舞台が私の故郷に近いので」という感慨は、距離的にして地域的な事実だけではなく、自らの境遇と重ね合わせての告白だったに違いない。

田山花袋(本名・録弥ろくや)は父・田山鉤十郎、母・てつ(田山賀蔵の娘で同姓である)の次男として明治五年(一八七二)一月二日(陰暦では明治四年二月一日)に、栃木県(明治九年より群馬県)邑楽郡館林町一四六二番地屋敷(通称・外伴木そとばんぎ、現・尾曳町)にて生まれた。館林は秋元礼朝侯(但馬守)六万石の城下町であり、『明治史要 附表ひょうひつ』によると、明治維新当時(明治四年七月一日「使府縣戸口概評」に基づく)の戸数は、一万五三二六戸にして、七万二九八五人を数える町であったという。

田山家は代々この藩主・秋元侯に仕えてきた藩士であり、弘化三年(一八四六)に出羽の国・山形藩からの移封に伴い、時の藩主・秋元志朝ゆきともと共に館林に住むようになったのである。廃藩置県の詔勅によって館林県となったが、「明治四年一月一三日館林縣ヲ廃ス」の命によって栃木県となり、同九年より群馬県となって今日に至ったのである。

父・鉤十郎(天保九年生まれ)は、廃藩から維新に伴う残務整理の

とが「自然主義」の眼目や方法であり、真髓であった。その「自然主義」の観点や眼力、感性が事の本質、及び真偽、善悪なども識別し、解決の方途を探索、選択、実践しながら理解、改善を促し、理想の獲得を果たすというものである。だから、小田切秀雄が言うように、「自然主義の確固たる近代的要求のたたかいは、情熱と関心が『私』の『告発』という狭い限界にとどまって、客観的世界の追求にまで文学的におしひろげられなかった。」としても、「自然主義者には意識的な、自覚された『社会』や『歴史』がなかったということによって、この社会的意義を不当に低く評価することは許されぬ。」¹²⁾のである。

田山花袋の『田舎教師』もまた小田切秀雄のいう「社会的意義」を有する物語であり、時の「社会」や「歴史」という「環境」を反映し、作者・花袋と登場人物たちが共有する愛郷心（パトリオティズム）¹³⁾に溢れた文学作品として、これからも愛読者を絶やさないであろう。

四、「地元」という「環境」について

『田舎教師』の五十章は長い記述となっている。その冒頭には次のように書かれている。

羽生に移転する前日の日記に、かれはこう書いた。

「二十六年故山を出でて、熊谷の桜に近く住むこと数年、三十三年には此処忍沼のほとりに移りてより、又数年を出でずして蝸牛の

その如く、又も重からぬ殻を負ひて、利根河畔羽生に移らんとす。奇しきは運命のそれよ、面白きは人生のそれよ、回顧一番、笑つて昔古びたる城下の縁を出でて去らんのみ。歴史の章は斯の如く、又斯の如くして改められん」

羽生の大通りをちよつと裏に入った処にその貸家があった。探してくれたのは荻生さんで、持ち主は二三年前まで、通りで商売をしていた五十ばかりの気の好きそうな人であった。

この「日記」の書き手は物語のなかの「かれ」、即ち林清三ということのだが、『田舎教師』の作者・花袋が亡き小林秀三の「日記」を活用したのだから、カギかっこをつけて原文のままに記載したのかも知れない。その点について、花袋は次のように振り返っている。

日記は、その死の前一日までつけてある。勿論、寝ながら、かつ苦みながら書いたらうと覚しく、墨もうすく、字も大きく拙く書いてあるけれど……。私はそれを見て泣きたいような気がした。遼陽の攻略の結果を、死の床に横たわって考えている小さなあわれな日本国民の心は、やがてこの世界的光栄をもたらし得た日本国民すべての心ではないか。

それに、舞台が私の故郷に近いので、一層その若い心が私の心に滲み通って感じられるように思われた。日記を見てから、小林秀三君はもう単なる小林秀三君ではなかった。私の小林秀三君であっ

が、幾度吾人の眼前に演じられたか？ 非立憲的な事実のみが跋扈して居る様な事はないか？ 政治上理想の結合なるべき政党が、此の国に於いては単に利益と野心の結合に過ぎぬではないだらうか。」¹⁰などと、社会の動向や人々の言動に傾注しながら、立憲君主制の実態について批評しているという事実をも忘れてはならない。

明治三四年（一九〇一）には第一次桂太郎首相（長州藩士。三度の首相として明治三五年の日英同盟締結、同三七、八年の日露戦争、同四三年の日韓併合条約締結などにあたる。一八四七―一九一三）のもと、西園寺公望（のちに第一次、第二次首相。一八四九―一九〇四）が政友会の総裁に就任するや「桂園時代」と呼ばれる政治が施行され、やがて「大正の政変」と言われる激動の時代へと突入して行くのである。第一次桂太郎内閣（明治三四年から同三九年）は、政友会の伊藤博文総理大臣（伊藤博文は第四次にわたって総理大臣を務めた）の後任であり、日清戦争後にして戦争に対する賛否論議が盛んとなり平民社（幸徳秋水、堺利彦たちが創設し平民新聞を発行。二年後の三八年に解散させられる）が設立されたり、同三七年の日露戦争の勃発に伴い愛国婦人会が結成されたりするという保革両者の社会的な活動が表面化していくのである。

時の政府（政治）は、海外向けには「富国強兵」の帝国主義の圧政を強行し、国内向けには「殖産興（工）業」「脱亜入欧」を推進する立憲君主制を建て前とした藩閥中心の強権であった。明治四二年一月二六日、伊藤博文の暗殺事件、翌四三年（一九一〇）五月の大逆事

件（翌四四年には幸徳秋水をはじめ一二名が死刑）を経ての一〇月に韓国併合。同年には文芸雑誌『白樺』が創刊され、理想とする人道主義が高唱された。翌四四年九月には女性たちだけの手によって文芸雑誌『青鞥』が創刊され、女性解放運動の先鞭を告げた。

いずれの主義主張も、結社や創刊、運動、活動にあっても国家権力の強化や増大を図ろうとする政策に翻弄されながらの迎合や追従であり、反発や抵抗であった。それだけ国民への影響が具体的に、かつ深刻になってきたという証左でもあった。だから、強権のもとに於ける政治主導に対する国民の無力感や虚脱感などの蔓延する一方で、心ある人々の危機感や緊張感を生み出し、事実や現実を直視するという「自然主義」が受容されたのである。社会の動向にあとづけて「無理想無理解の自然主義がこの時代の支配的な文学となつたのは偶然ではない。」¹¹という指摘もあるが、眼前の事実や日常の現実を直視し、ありのままの描写に心掛けるという手法が、理想の希求にして改善や解決への手段であり、必然的な階段だったのである。

世相は、時の強権的な政治に限らず、歴史的な抑圧や拘束、日常的な不自由からの解放を悲願とする自覚が「自然主義」を必要とし、獲得させたのであろう。つまり、国是である「富国強兵」「脱亜入欧」の別称に等しい「近代化」の徹底に腐心する作家的な政策や戦争、人間的にして機械的な「殖産興業」に伴う産業や工業によつてもたらされつつある弊害や陥穽、矛盾、皮肉、ジレンマ、パラドックス、コンフリクト（葛藤）などを、ありのままに認識したり告発したりするこ

遼陽の占領がはじめて知れた時、かれは限りない喜悅を湛えて、
「母さん！ 遼陽が取れた」と、さもさもうれしそうに言った。
(六十一章の終わり)

そして、六十二章の冒頭は「枕許に坐った医師の姿がくつきり見えた。」で始まり、直ちに主人公・林清三の臨終が告げられる場面へと展開されていく。

遼陽の陥落は、小林秀三の死去に先立つ九月四日であったというのだから、発表済みの『田舎教師』の創作に合わせた意図的な記述である。さらに、花袋は「小林秀三」の死去を知るに及んで、「私は一番先に思った。」こととして、次のように述べている。

「遼陽陥落の日に・・・日本の世界的発展の最も光栄ある日に、万人の狂喜している日に、そうしてさびしく死んで行く青年もあるのだ。事業もせずに、戦場へ兵士となつてさえ行かれず。」
こう思うと、その青年、田舎に埋もれた青年の志と言うことについて、脈々とした哀愁が私の胸を打った。

続けて、「私は青年・・・明治三十四、五年から七、八年代の日本の青年を調べて書いて見ようと思った。」(『東京の三十年』岩波文庫、二五二頁) というのである。花袋のいう「明治三十四、五年から七、八年代の日本」は、日清戦争(明治二七、八年)を契機として、国

策を支え支えられた資本主義が急激に拡大し、御用商人(政商)とおぼしき資本家と、人権の保障もなく現場に強いられた労働者との階級的な対立が、法律や制度上の不備に伴って表面化し、社会的な矛盾や不条理に覚醒した人々による労働運動が台頭したり、政治的な改革を求め啓蒙活動などが激しく叫ばれたりし始めたのである。

花袋の『田舎教師』は、明治四二年(一九〇九)に発表されたのだから明治二七、八年の日清戦争、同三七、八年の日露戦争の後である。いずれの大戦にも莫大な犠牲を払いながら勝利したものの、戦勝気分の高揚と共に知的な啓蒙活動や、政府を批判する社会的な運動も旺盛になり、いわゆる大正デモクラシーへの胎動期を迎えていた。たとえば、明治三八年(一九〇五)九月、ポーツマス講和条約の締結によって日露戦争は終結したものの、ロシアからの賠償や補償が少ない、取れないことに不満を抱いた人々が、東京・日比谷(日比谷焼き討ち事件は同九月五日に発生)などの各地で日露講和条約反対運動を展開し、時の藩閥政府(政治)に反発、抵抗した。

政府は抗議や批判をかわずかのようには、韓国に統監府を設置して覇権の足場をつくった。翌三九年二月には日本社会党(翌年に解散させられる)の第一回大会が開催され、藩閥体制を批判した。時を同じくして石川啄木は、「日本が僅々五十年間に驚くべき改革を成就した幸運国であることは、予も亦是認する処である。さうして日本は今、立憲国である。東洋唯一の立憲国である。然し、と自分は思ふ。此の立憲国の何の隅に、真に立憲的な社会があるのか？ 真に立憲的な行動

人公とした『田舎教師』という物語が与えた影響や反響は、発表当時にとどまらず、以来一〇〇年になろうとしている今日にあっても、愛読されていると共に林清三こと、モデル・小林秀三の追善供養を続けているという事実をして、『田舎教師』という物語が、由縁の深い地域や愛惜する人々のなかに歴史的な「社会」を紡ぎだし、自らの人生を考察すべく「文化環境」を培いながら継承され、今も猶息づいているという事実には他ならない。小説『田舎教師』は歴史的な「社会」を担い、精神的な「文化環境」を形成するまでに醸成され、かつ融合しながら伏流水のように息づいてきたという証左でもある。

中山花袋は『東京の三十年』（大正六年六月一日、博文館より刊行。当小考の原文は岩波文庫より引用した）のなかで、『田舎教師』の創作に至った動機や経緯、その当時の思い出などを記している。その書き出しは次の通りである。

私は戦場から帰って、間もなく〇君を田舎の町の寺に訪ねた。その時、墓場を通り抜けようとして、ふと見ると、新しい墓標に、「小林秀三之墓」という字の書いてあるのが眼に着いた。新仏たいぼとけらしく、花などがいっぱいそこに供えてあった。（『東京の三十年』岩波文庫、一二五頁）

花袋は従軍記者として日露戦争（明治三七―三八年）に参加し、その見聞をもとにした『第二軍従征記』（明治三八年一月に博文館より

刊行）を書き、後に「戦争もの、兵隊もの」と呼ばれる物語の創作にも及んでいる。『東京の三十年』のなかでも従軍記者としての体験に触れながら、次のように続けている。

寺に行つて、〇君に逢つて、種々戦場の話などをしたが、ふと思ひ出して、「小林秀三つていう墓があつたが、聞いたような名だが、あれは去年、一昨年あたり君の寺に下宿していた青年じゃないかね。」

「そうだよ。」

「いつ死んだんだえ？」

「つい、この間だ。遼陽の落ちた日の翌日か何かだったよ。」

「可哀相なことをしたね、何だえ、病気は？」

「肺病だよ。」

「それは気の毒なことをしたね。」

私はその前に一、二度逢つたことがあるので、微かすかながらその姿を思い浮かべることが出来た。（『東京の三十年』岩波文庫、一二五―一二六頁）

とある。小林秀三の死去は明治三七年（一九〇四）九月二二日なのだから、「遼陽の落ちた日の翌日か何か」という記述は、『田舎教師』のなかの、

(二八八四—一九〇四) Ⅱ写真Ⅱの百一回忌が二三日、「夕雲忌」と改名して、羽生市内の建福寺で営まれる。田舎教師研究会の宮内芳子会長(69)は「百回忌で一区切りという声もあったが、作品が忘れられないためにも、法要を続けて行きたい」と話している。

「田舎教師」は、田山花袋が、二十歳で病死した小学校教師、小林秀三の残した日記をもとに執筆した。明治期、若くして死んだ青年の夢と苦悩を、羽生の自然とともに描き、島崎藤村の「破戒」と並ぶ自然主義小説の傑作。

一九三四年(昭和九年)に文学ファンによって初法要が営まれて以来、有志によって半世紀にわたって法要が続けられている。

太宰治の「桜桃忌」、樋口一葉の「一葉忌」など作家をしのぶ法要は多いが、作品モデルの法要が百回忌を超して営まれるのは極めて珍しい。

建福寺は、モデルの小林秀三が下宿していた。花袋の妻の兄で詩人の太田玉茗(一八七一一九二七)が住職をしていた寺でもあり、小林秀三の墓のほか、花袋の代表作「蒲団」のモデルとなった女性の子供の墓もあり、花袋にとってはゆかりの深い寺。

大学生の時、作品のもとになった日記を遺族の家から発見した宮内さんは、『田舎教師』は、花袋が頻りに訪れて愛した明治時代の羽生の人と風物を描き、羽生とは、切っても切れない作品。『夕雲忌』の名称は、俳句や和歌を書いた秀三のペンネーム『夕雲』からとったが、夕日の美しい羽生にふさわしい」と話している。

以上が全文である。私もまた「作家をしのぶ法要は多いが、作品モデルの法要が百回忌を超して営まれるのは極めて珍しい」ことだと思う。しかも『田舎教師』の発表は明治四二年(一九〇九)なのだから、二五年後の「一九三四年(昭和九年)に文学ファンによって初法要が営まれて以来、有志によって半世紀にわたって法要が続けられて」、平成一六年(二〇〇四)九月三日をして「百一回忌の法要」を営むまでに支えて来られた「文学ファン」や「有志」の方々をはじめ、「田舎教師研究会」のメンバーに敬意を表したい。これは「燕雀いづくぞ鴻鵠の志を知らんや」とも、「小人は始めありて終わりなし」とも戒められているように、またしても「雨だれ石を穿つ」「継続は力なり」と共に、「小を積んで大を成す」という格言通りの善行を重ねての慶事にして、称賛に値する偉業だと思わずにはいられない。

「善を責むるは朋友の道なり」と言われるが、二十歳にて病死した小林秀三の追善供養のための法要を、「百一回忌」を数えるまでに営まれて来た要因は、小説『田舎教師』を愛読するだけではなく物語の舞台である熊谷、行田、羽生などの各地に息づいている郷土愛の具現であり、モデルの小林秀三と関わり合い、支えたであろう同級生たち(郁治や荻生君たち)、作者の田山花袋、花袋の義兄である太田玉茗(花袋の妻・里さの兄)、そして小林秀三が埋葬されている建福寺(小説では成願寺じやうがんじ)などとの由縁を愛惜する「精神の作用」に導かれた、やはり「結晶作用」であると言えよう。つまり、モデルの小林秀三を主

結実したのではなく、「雨だれ石を穿つ」の如く「忍辱」の時を要する「精神の作用」であり、日々の蓄積に伴う不断の大事である。

人は他人に憧れたり異性を求めたり、歓喜や感動、辛苦や悲哀、迷惑、不愉快なことなどを与えたり与えられたりしながら、自我意識に目覚めたり目覚めさせたりすることも必然である。「袖すり（振り）合うも他生（多生）の縁」「躓く石も縁の端」にして、「人の振り見て我が振り直せ」「情けは人のためならず」「ただも行かれぬが無沙汰のなりはじめ」などと配慮し、「うたた寝も叱り手のない寒さかな」「寝ていても団扇の動く親心」、そして「親思う心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ」（吉田松蔭）などという人情の機微に触れることであらう。いずれも人との関わり合いがあつてこそその人情であり人生（物語）である。多くの関わり合いがあつてこそ得難い出会いの機会にもなれば、悲哀の涙にくれる別離の時にもなる。関わり合う人々によって引き出され育まれる「人間関係力」ともいうべき総合的な「結晶作用」を生み、関わり合う人々こそが「私」をつくる「環境」である、ということをおきたい。

『田舎教師』の主人公・林清三を例にあげた所以もまた、両親だけではなく学友である加藤郁治、その父親も含めて、やがて弥勒の小学校に赴任し、教員として勤めながら出会うことになる多くの人々が清三自身を、そして清三の人生を育みながら『田舎教師』という物語が展開されるのである。つまり「田舎教師」という人がいたのではなく、林清三という「人」がいて、清三と関わり合う人々が「田舎教師」を

育て、『田舎教師』という物語が創造されたのである。

日本の近代文学史上、『田舎教師』が自然主義文学の代表的な作品として今も猶位置づけられているのは、医師にして歌人でもあった齋藤茂吉の、「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」という手法と相俟つて、主人公の清三をはじめ、清三と関わり合い、支え合う多くの人々が醸し出す物語の「環境」に恵まれていたからでもあらう。『田舎教師』という物語は、主人公・林清三の若死（肺病。モデルの小林秀三は実に享年二十歳であつた）によつて終了したものの、当時の社会や地理、宿世の因縁による処世や人情の機微、そして青年の志などを知るべき一冊の書物として愛読者に緋かれながら、今も猶「読書の秋」に限らず文化的な「環境」に寄与しているという事実を忘れてはならない。

三、「社会」という「環境」について

平成一六年（二〇〇四）九月一七日（金曜日）付けの「読売新聞」は、「田山花袋『田舎教師』モデルの小林秀三」「百一回忌 改名して『夕雲忌』」「三日、羽生の建福寺『作品忘れられないように』」などという見出しと共に、小林秀三の顔写真を添えて次のように報じていた。

自然主義文学の代表作、田山花袋（一八七二—一九三〇）の「田舎教師」のモデルとなつた羽生市内の小学校教師、小林秀三

消極的な印象を受ける。それは「家が貧しく、到底東京に遊学など出来ぬことが清三にも段々意識されて来たので、遊んでいても仕方がないから、当分小学校にでも出た方が好い」という話になった。今度月給十一円^⑤でいよいよ羽生在の^{みづ}弥勒の小学校に出ることになったのは、全く郁治の父親の尽力の結果である。」(一章)という説明に出会うからでもある。

だから、清三は青雲の志を抱きながら、「家庭の事情」で「遊学など出来ぬ」と断念せざるを得ず、いかにも不本意だという悔しさ混じりの未練を訴えているかのように読みとれる。逆に「家庭の事情」が許せば「東京に遊学など出来て」、「立身出世」が可能なのに、という功名心や自負心、自尊心、自恃、そして悔恨、諦念、無念などが隠されているのだということは容易に想像がつく。だからなのであろう、強い願望や矜持、功名心などを裏つけるかのように「当分小学校に、でも出た方が好い」(傍点・引用者)と、自嘲気味にして他人事のように記述されたのだと思われる。いずれにしても主人公・清三の複雑な心境を反映した書き出しであり、「薄倅の運命」に甘んじて行くような予感を与え、小学校の教員に身をやつして行く前途を暗示しているような気がしてならない。

こうした清三の心境や心理、そして境遇を承知してのことであろうから、「いよいよ羽生在の弥勒の小学校に出ることになったのは、全く郁治の父親の尽力の結果である。」という友情や厚情、高配に救済されたのである。「郁治」とは、清三と同じ中学校の学び舎にて机を

並べただけではなく、お互いの家を行き来しては夢や希望を披瀝し合いい、人生や恋愛について語り合ってきた気の置けない親友である。その加藤郁治の口添えもあつて「小学校にでも出た方が好い」となり、「いよいよ羽生在の弥勒の小学校に出ることになった」のである。親友である郁治の口添えは、清三に施されると共に自らの父親にも向けられていたのである。なぜならば「郁治の父親は郡視学であつた^⑥」という社会的な地位によって「尽力」を得られ、実現したのである。全く郁治の友情と郁治の父親の御蔭様という他はない。当の郁治は「来年の春、高等師範学校を受けて見ることにした。」(六章)と清三に語り、境遇の違いを露呈している。

清三が郁治の口添えに伴い「郁治の父親」によって「尽力」を得られたのは、郁治と同級だという縁にとどまらず、「加藤の家は五町と隔たつておらなかつた。」(六章の冒頭)というほどの距離に自宅があつて、行つたり来たりしながら腹藏のない語り合いなど、蓄積された交誼の賜に他ならない。他者の高配や鞭撻、助力を得なければならぬのは、人の世を生きる上で不可欠なことであり、お互いの信頼や信用、そして義理や人情の然らしめるものなのである。その高配は、お互いの人間性が醸し出す化合や融合にして「結晶作用」に等しいのである。つまり、「私が結晶作用と呼ぶのは、我々の出会うあらゆることを機縁に、愛する対象が新しい美点を持つていることを発見する精神の作用である^⑦。」と言われるような「精神の作用」があつたということである。清三と郁治の友情と同じく、その「結晶作用」もまた短日的に

田圃にはげんげが咲き豪家の垣から八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出を出した田舎の姐さんがおりおり通った。

羽生からは車に乗った。母親が徹夜して縫ってくれた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵児帯、車夫は色の褪せた毛布を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍った。

清三の前には、新しい生活がひろげられていた。どんな生活でも新しい生活には意味があり希望があるように思われる。五年間の中学校生活、行田から熊谷まで三里の路を朝早く小倉服を着て通ったことももう過去になった。(一章)

清三は住まいの行田から熊谷の中学校(現、埼玉県立熊谷高等学校)へと三里(一里は三六町で、一里は三、九二七キロメートル)の道を通って卒業し、羽生の先、三田ヶ谷村の弥勒高等尋常小学校に赴任すべく行田から車(当時は人力車)に乗って行ったというのである。「四里の道」は弥勒の途中にある「井泉村役場」までの距離であり、「弥勒までは其処からまだ十町ほどある。」と二章(『田舎教師』の原文には漢数字だけで「章」の文字は用いられていないのだが、当小考では便宜上用いた。一章も含め、以下同じ)の冒頭に書かれている。「十町」とは約一、〇九一キロメートルである。

やがて訪れた三田ヶ谷村役場での手続き上の行き違いもあって、その夜は村役場の二室に泊まることになった。そして、清三は自らの身の上を振り返り、行く末を思いやる。

清三が中学校を了えた後の、さらなる進学を断念し、小学校の教員として身を立てようと決意させたのは「家庭の事情」であった。それは「幼い頃は兄弟も多かった。その頃父は足利で呉服屋をしていた。財産もかなり豊かであった。七歳の時没落して熊谷に来た時のことをかれは臙げながら覚えていた。母親の泣いたのを不思議に思ったのを覚えていた。今は・・・兄も弟も死んで了って自分一人になった今は、家庭の關係に就いても、他の学友のような自由なことは言っていられない。」とし、「人の好い父親と弱々しく情愛の深い母親とを持ったこの身は、生まれながらにして既に薄倅の運命を得て来たのである。」(三章)という状況説明や告白から、諦観に基づく「運命」との妥協のように思われやすい。だが、沈黙考に伴う冷静な諦観の奥底には、「運命」に翻弄されまいとする反動的にして強靱な自我意識や、「母親が徹夜して縫ってくれた木綿の・・・」「母親の泣いたのを不思議に思った・・・」などと思いを致す暮らしや、心を支える「弱々しく情愛の深い母親」に対する「孝心」のあつたことを見逃してはならない。だから、冒頭の「四里の道は長かった。」という短い一文のなかには、実質的な距離にとどまらず、清三の「決断」するまでの熟考や過程、これからの期待や不安なども含まれているということをも読みとらなければならぬのである。

作者の花袋は、清三の心境を「何となく胸が躍った」と説明し、「清三の前には、新しい生活がひろげられていた。どんな生活でも新しい生活には意味があり希望があるように思われる。」という表現から

「環境」は工場で大量生産され、「人工環境化」に及ぶ無機質な「もの」

と異なり、変化に富む四季、季節を彩る多くの植物や動物たち、息づいている風俗習慣、文化教養などが含まれた身近な教師や教材であり、心身を育む資糧にして「人生」の良き伴侶と言えよう。

花袋の『田舎教師』は、主人公・林清三の後半生を中心にしながら「人」や「社会」、「地元」というそれぞれの「環境」と深く結びついで醸し出された物語である。「環境」に関心を寄せて味読すれば「環境」の何たるかを知り、「環境」に生かされているという自覚に至れば、もっと便利に豊かになるだろうと無分別に期待したり、獲得が最大の幸福や歓喜だとして「ないものねだり」の進歩発展、開発、スピード化に追従したりする打算的な合理主義に違和感を覚え、抵抗したり拒絶したりすることであろう。なぜならば、河合雅雄氏が言うように「われわれが乗っている、文明という高度に技術化された乗り物も、ジャンボ機と同じような運命を担って走り続けていると、私には思われてならない。このまま加速度が増していけば、いつかカタストロフが待ちかまえているだろう。その兆しはあちこちにもう見えはじめている。」³のだから、身近なところに今も息づいている伝統的な「もの」の機能や役割に目を向けて、「吾、唯足るを知る」という自足や自得、自省、自制、自粛、自愛、自尊、自主、自立などを希求し、掛け替えのない「環境」に適應するように心掛けるべき大切さに気づき、一回生起の我が身を愛惜しないではいられなくなるであろう。

二、「人」という「環境」について

田山花袋の長編小説『田舎教師』は、明治四二年（一九〇九）に発表された。花袋は時に三八歳であった。『田舎教師』の創作や発表に至る過程については、田山花袋研究の第一人者である小林一郎氏の調査によれば、明治四二年の「やがて梅雨の降りしきる六月を迎え、『田舎教師』を仕上げるために本格的に取り組み、七月には材料を集めるために、『田舎教師』のモデル・小林秀三の生活した埼玉県行田町に出かけ、石島徽山や今津寛之助を訪ね、行田青年倶楽部の二階で、資料を中心に話し合い、実地を踏査して、羽生に立ち寄っている。十八日からは、一日十二枚位の速度で書き継いでいる。」とあり、やがて「七月十三日で『田舎教師』は百四十三枚になっているので、一日平均六枚（四百字詰）程度書いているのである。全部で、四百五十八枚と考えられるので、この速度で、九月の初旬に脱稿し左久良書房にわたした。約一ヶ月かけて校正して、十月二十五日に出版した。」⁴ものだという。

物語の主人公は、実在したモデル・小林秀三（現、羽生市の郊外にあった小学校の教員。一八八四―一九〇四・九・二二）こと、林清三という「田舎教師」に身をやつしていく青年である。物語は次のような書き出しで始まっている。

四里の道は長かった。その間に青縞あおじまの市の立つ羽生の町があった。

田山花袋 『田舎教師』のなかの「環境」考

千葉 貢

一、はじめに——息づいている「環境」のなかで

「環境」という言葉には、「身土不二」の「自然」が同義語や固定観念のように付帯し想起されがちである。さらに、私は「自然」だけではなく、人を育むのは親疎の度合や関わり合いの程度にも伴う「人や歴史的な「社会」があり、風俗習慣や文化教養、自然を含む生活圏にして「地元」と呼ばれる現実的な諸事項もまた「環境」に他ならない、と思う。そこで「環境」を大きく三つに分けて、それぞれの観点から『田舎教師』を繙き、私なりの説明を試みたい。

『田舎教師』という「物語」を支えている「自然」の役割はもとより人間を育む「人」や「社会」、そして「地元」という、これらの「環境」の大切さについて強調せずにはいられない。私たちにとっては「自然」や「人々」との関わり合いだけが人生でも物語でもないだろう。だから、私もまた「自然」といふとき、通常われわれを取り巻く外的環境をさしている。この自然の重要性については、多く語られてきた。その大切さと言うまでもないが、系統発生的適応を通じて、われわれの心性の奥深く形成された「内なる自然」については、あまり多く言及されて

いない。^①という指摘の通りなのだが、「自然の重要性について」重ねて述べておきたい。ただ、「われわれの心性の奥深く形成された「内なる自然」については、あまり多く言及されていない」のは、「人類は文化的な存在である。文化というのは反自然的なものなので、人類は存在自体が反自然的なものだといってよい。農耕・牧畜文化の創出によって、人間は多様な文化的衣装をまとい、人間の本性を覆いかくしてしまった。人間とは何か、という問題の解明が難しいのはそのためである。」というのだから、私には「文化という衣装をはぎとった生身の姿^②」について解明するだけの知識や能力はない。けれども身近な問題が含まれていると思われるだけに、『田舎教師』と「環境」との関わりについての考察と共に、まずは「衣装」の解明に挑みたい。

自然主義文学の代表的な作品である『田舎教師』は、今日と較べものにならないほど便利なもののない時代に書かれたとは言え、多様な「人」や政治的な動向に伴う歴史的な「社会」、有機的にして有為な「地元」というそれぞれの「環境」と関わり合いがある。それらが「人生」という「物語」を創造する貴重な素材にして「名脇役たち」、「名助演たち」なのだということを教えられたのである。